

それぞれの眼差しと
対話から生まれるアート

ARTIST'S VIEW / インタビュー
ゲートゲンス・ヒルシュ
gaetgens.hirsch

特集「前橋まちなかウォッチング」

アーティストコラム 石内 都

ARTIST'S VIEW

デイビッド・ゲートゲンス+ダニエラ・マリア・ヒルシュ

ゲートゲンス・ヒルシュ
gaehtgens.hirsch

デイビッドとダニエラが
滞在中に訪れた場所で
撮影したスナップ。



① 初めての前橋はインスピレーションにあふれ、あらゆるものが新鮮に見える。



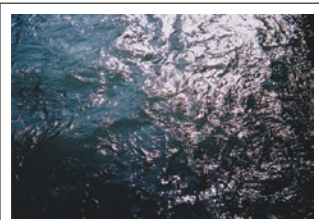
② 日本の窓に映る陰影を楽しんでいます。



③ 多くの車が景観の妨げになっているのに比べて、これは賢い駐車場のしかた。



④ 植物をリビングに持ち帰りました。



⑤ たくさんの水の模様。



⑥ 小さな緑の島が大好きです。

INTERVIEW

常に感覚をオープンにして、
あらゆることを問い続ける
ALWAYS KEEP ON OPENING MIND AND QUESTIONING EVERYTHING.

ともにドイツの出身で、お互いに違ったバックグラウンドを持つダニエラとデイビッドによる「ゲートゲンス・ヒルシュ」。

映像やデジタルデバイスを駆使して表現される彼らの作品のベースには2人の緊密な対話があり、鑑賞者のコミュニケーションもまた作品の一部となる。アーツ前橋の滞在制作プログラムで今回が初来日となるダニエラとデイビッドの2人に、彼らの好きな緑茶を飲みながら、活動や作品の背景について話を聞いた。

聞き手：殿岡 渉（あしか図案）／通訳：野崎美樹

―普段の活動はヨーロッパが中心なんですか？

デイビッド・ゲートゲンス（以下 Dv）ベルリンに住んでいてベルリンで仕事をしていますが、自分たちが扱いたいテーマはもっと広い世界に通じるものなので、いろんな場所に行って活動しています。

ダニエラ・マリア・ヒルシュ（以下 Dn）いつも自分の周りの環境を変えたり、いろんな所を比較しながら見ていくのが重要だと思っています。

Dv そうすることで様々な感覚をオープンにするのはアーティストにとって大切なことだと思います。

―お二人の経歴について伺いたいのですが、まずデイビッドさんのバックグラウンドは？

Dv まず最初に写真と映像を学びました。アシスタントとして技術を習得した後、アートを学びたいと思ってアートアカデミーに通いました。両親が美術史家だったので、子どもの頃から博物館や美術館に連れてってもらっていたんですが、両親が興味がある分野は

18～19 世紀のフランスの美術などで、私自身はモダンアートに興味を持っていました。当時の親友の父親に、ベルリンに住むアメリカ人のフルクサスのアーティスト、エメット・ウィリアムスがいて、彼は家に子どもたちを呼んで、アートのことや私たちが今生きている世界についてのことなどを話してくれたんです。先生のように上から物を言って教えるのではなく、子どもと同じ目線に立って教えてくれて、子どもだった自分が質問すると、いつも丁寧に答えてくれました。その経験は大きかったですね。

Dn 彼に聞いたエメット・ウィリアムスの奥さんの話なんですが、彼女自身もアーティストで、「F」の文字を集めるというプロジェクトをしていたんです。もしもチラシなどに印刷された「F」の文字を見つけたら持ってきてほしいと言われていた。

Dv その時これは人生で初めて得た「仕事」だと思い、本当に真剣にやらなければいけないことだと思って実行しました（笑）。夢中になって「F」を切り取って集めたんです。5 歳くらいだったんですが、その時の経験は私の成長にとってすごく重要だったと思います。Dn 重要でないように見えることをすごく真剣にやるということがアートだと思います。ドイツの社会ではあまりないことです。

―ドイツでは無駄なことをするのはよくないことと見なされる？

Dn はい。プロテスタントの文化があって、人は自分にとって有益なことをしなくてはならないという基本的な考え方があるからかもしれません。アーティストですら有益なことをしなくてはならないという風潮があります。私たちが大事にしている、結果よりプロセスを重視するということも、ドイツ人の基本的な考え方は正反対のものです。

Dv ドイツは物質主義の社会。車を買って家を買ってボートを買って……というのがいとされる傾向にあって、アーティストとして生活するのは割と大変なんです。メディアアートやパフォーマンスなどの、物として売れないアートでやっていくのはさらに大変です。

Dn ドイツではアートは投資の一環として買われるので、メディアアートのコレクターというのは少なく、難しいですね。いるにはいるんですけど、そういう人は自宅にメディアアートのための部屋を作って、そこに作品を置いたりしています。

Dv これは夢の話ですが、今どこの家庭にもテレビがあるように、みんながメディアアートを家に置くようになればいいと思っています（笑）。

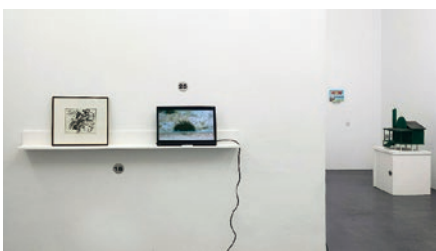
―ダニエラさんもアートのバックグラウンドが？

Dn 私の最初のバックグラウンドはクラフトです。家族が職人の一家だったので、高校を卒業後、大学には行かず私もその道に進み、主に舞台衣装の製作者として働き始めました。ドイツでは仕事を得るのが難しかったので、ロンドンに移り、舞台衣装を作る会社でコスチュームを作る仕事に就きました。ロンドンで2年間働いたあと、もっとアートやコンセプチュアルな考え方、スケッチなどを学びたくてドイツの美術大学に入りました。その大学はバウハウスの教育方針を受け継いだユニークな大学で、学生と先生が一緒になって相互にコミュニケーションをとりながら学んでいくような授業方針でした。そこで色々なことに興味を持ち、色々なことを試しながら学ぶことができました。私のバックグラウンドのコスチュームも、一種のコミュニケーションするメディアだと考え、メディアアートに興味湧き、その分野を勉強するようになりました。

―2 人が一緒に活動するようになったきっかけは？

Dn とてもゆっくり、少しずつコラボレーションしていった感じですが、初めての大きな共同作業は、デイビッドが卒業制作の映画を作った時に私がコスチュームを担当したことです。その少し前に彼がアフリカのアニミズムの儀式をリサーチしていた時に、文化論のような話を2人でしていて、それが卒業制作のコラボレーションに繋がったんです。映像に対してただ衣装を作るというのではなく、何を伝えるか、文化的にどう捉えるかといった対話を重ねていく中で、2人の興

Photo: 十田マユ



《URCHIN》2015

映像（シングルチャンネル、ループ）48 分 ステレオサウンド
ワシリー・カンディンスキー《無題》木版画 展示風景
(Adamski Gallery for Contemporary Art /ベルリン・ドイツ)

の文化に対して興味はありましたか？

Dv もちろんです。アジアはいつもヨーロッパをインスパイアすると思っていて、子どもの頃から日本のアートの色の使い方やエネルギー、禅のような哲学の部分に感銘を受けていました。

Dn 私は特にコスチュームやファッションのバックグラウンドがあるので、デザイナーの川久保玲やヨウジヤマモトを知っていました。ヨーロッパとは大きな違いがあり驚きとともに印象深い存在です。日本のアートも、近代や現代美術になるとヨーロッパ的な傾向が見られますが、むしろ昔の水墨画などに惹かれます。バウハウスのデザインもシンプルな力強さやタイポグラフィが特徴ですが、彼らもシンプルな日本の美術に興味を持っていたんです。

Dv パリでの最初の日本の芸術に対する展覧会もセンセーショナルだったし、アフリカのマスクを参照したピカソの絵があるように、別の文化がお互いに影響を与え合ったりするのが面白いと思います。

Dn 私がメディアアートを学んでいた 90 年代末には、デジタル技術を使ったアートの最先端も日本でした。その当時見た日本のアートには強烈な印象を受けました。とても新しい技術を使っていたんです。Dv 勉強し続けたり、自分の中でいろんな質問をし続けるうえで、こんなふうにいつも違う環境にいることはすごく新鮮です。

Dn 日本では私たちは言葉がまったくわからないので、そういう状況に身を置くことで、自分の感覚がオープンになってとても楽しいです。

パブリックプログラム

2018 年 8 月 26 日（日）

豎町スタジオ（予定）

*詳細はアーツ前橋公式サイトをご覧ください。

gaehtgens. hirsch
ゲートゲンス・ヒルシュ

ダニエラ・マリア・ヒルシュ（1973 年生まれ、フルク＝ギーベンシュタイン美術大学卒業／ザール）とデイビッド・ゲートゲンス（1973 年生まれ、ケルン・メディア芸術大学卒業）は、2012 年からゲートゲンス・ヒルシュ（gaehtgens.hirsch）としてコラボレーションを開始。現在は、ベルリン（ドイツ）を拠点に活動。2012 年より、ドイツ、ラトビア、イタリア、アメリカでの展示のほか、ザクセン・アンハルト州とドイツ工業連盟からの助成金取得。ケーパー基金賞（ドイツ論文賞）受賞。ヘローナ大学を通じて、2018 年テキストをベースとした研究物出版予定。

群馬大橋

国道17号で石倉町から大手町1丁目方面に利根川を渡る群馬大橋は、下流にあった利根橋の老朽化に伴い1953（昭和28）年に開通した。全長280メートル、幅13メートルの旧橋と、1997（平成9）年に架設された新橋の2本が密接している。

旧橋は（鋼）下路ラングートラス橋と呼ばれる構造で、4連のアーチと桁を結ぶ垂直の部材で路面を吊っている。機能が剥き出しになった構造物が醸し出す圧倒的な存在感は、言葉少なにこのまちの歴史を物語っているように思える。

橋のたもとに立つて、夕日を受けて輝くアーチの美しさに見とれていると、自転車に乗った数人の留学生が歓声を上げながら立ち止まり、スマホで写真を撮り始めた。彼らの目にこの風景はどう映るのだらう。日常の中のささやかな喜びを分かち合えた余韻はしばらく続いていた。



特集

視点を変えれば
この街は
ワンダーランド

前橋まちなかウォッチング

Model: 青山みらの / 久保瑛里佳

まちなかの商店街にはフォトジェニックなレトロ看板がたくさん！カメラ片手の散歩も楽しい。



古い看板もインスタ映えスポットに！



アーツ前橋周辺を中心市街地は、昔ながらの商店街が残るエリア。建物や看板、パブリックアートなど、目を凝らして歩いてみれば、そこかしこに気になるものが。普段は忙しく通り過ぎてしまうような場所も、注意深く観察することで新しい発見の宝庫となるかもしれません。視点を变えて、面白いモノを探しに、まちなかウォッチングに出かけましょう！



オリオン通りのタイルアートを見れば、ロサンゼルスの方角もすぐにわかる。



「抱きしめたい、地球。」と書かれているが、むしろ地球に抱きしめられている感のある広告。



商店街に残されたコンクリートの柱は人呼んで前橋のバルテノン神殿!? 駐車場として利用されているが、もとはどんな建物だったのだろう。

ふと見上げると、ビルの屋上に神社の赤い鳥居!? 一階は老舗の喫茶店。何か理由がありそうだ。どうやってお参りすればいいんだろう？



馬場川通りのビルの2階にめり込んだ車。坂の上からのコラボショット。



商店街と水門のナゾ

国道17号側の銀座通り入り口に立つ巨大な水門のオブジェ。銀座通りの足元のタイルは川を模したデザインになっていて、〈水と緑と詩のまち〉前橋らしいコンセプトを感じる。と思っていたら、呑龍飲食店街の入り口にも似たようなモチーフが！時代的にはこちらのほうが古そうに見えるが、なにか因果関係があるのだろうか？



まちなか最大級の謎オブジェ「ぐうちよきばあ」の前で。それにしてもなぜ「ぐうちよきばあ」なのか…。

中川原呉服店の「こて絵」看板



中央通り商店街の中川原呉服店は明治38年創業の老舗。建物の外壁に屋号が浮き彫りで書かれているが、これは「鑢（こて）絵」といって、左官職人が壁を塗るコテを使って仕上げたもの。ご主人に話を聞くと、今ではこの技術を持った職人がいないから珍しいのだそう。戦災の後に建て替えた時からあるので60年は経つとか。壁の色と同化して目立たない存在ではあるけれど、現在の看板には出せない味わい深い魅力があり、老舗の呉服店にふさわしい。

八幡屋のおしゃれなマネキン坊や



中央通り商店街の北側にある靴下専門店の八幡屋。ここを通る度にいつも目が合ってしまうあの子。お店の方に聞いてみると、昭和24年に靴下屋として創業して間もない頃から、お店の看板息子として店先に立っているのだとか。実は、推定年齢65歳の大ベテランでした。真夏になると半袖に、冬は毛糸の帽子にジャンパー、手袋と、季節ごとに着替えているらしい。その愛らしい瞳で、これからも商店街を行き交う人々を見守ってくれることだろう。

コグレデンキのショーウィンドウの猫



電気屋さんのショーウィンドウに並んだ家電のあいだに、こちらを見つめる愛らしい猫の姿が。気になってご主人に聞いてみると、修理中の手を止めて教えてくれた驚きの実事……。実はこれ、本物の猫の毛で出来ているらしい。なるほど、小さいながら納得の存在感である。店内にはレトロな真空管ラジオがあり、聞けばもともと在庫としてあったものをそのまま飾っているのだとか。鉄製の扇風機はご主人が修理済みで、スイッチを入ると軽やかに羽根を回し始めた。



空を指差す老夫婦と孫。そして謎のメッセージ。



本町一丁目のカラフルなアート作品。



足元のマンホールもよく見れば可愛い。

「サボテン少女」石内 都

フリーダ・カーロの遺品を撮影する為に初めてメキシコへ出かけた時、仕事の撮影とは別にもうひとつの目的を密かにもって行った。それは本場のメキシコでサボテン（多肉植物も含む）を見る事である。私とサボテンは個人的な思いと長い歴史をもっていて、サボテン愛とでもいうのだろうか、半端でない気持ちが持続している。サボテンはただ見ているだけでもその肉厚な姿が美醜の形態のひとつとして、ユーモアとストイックが共存するシルエットに、いつも惚ぼれ、うっとりしてしまうので、そのサボテンの原産地メキシコで、そこらじゅうに生えている風景を体感するのは、想像しただけでも愉悦に身をおくようでとてもうれしい。

サボテンとの関係は小学生時代にさかのぼる。ウォルト・ディズニー映画「砂漠は生きている」（1953年アカデミー長編記録映画賞）を横須賀の映画館で見て、初めてサボテンを知る。いっけんトゲ、トゲ、ゴツ、ゴツしている幹から絹のような艶やかな光沢をもつ花が、砂漠の中で人知れず咲き、ひと夜のうちに枯れていく。そのシーンにいたく感激して、幼な心に切なく美しく哀しいものとの出会いを感じ、サボテンという植物にすっかり惚れ込んでしまった。それ以来6畳一間の住宅の小さな庭にサボテンの植木鉢をオいたのである。

その小学生だった頃の私のサボテンは、今でも何代も引き継ぎながら、横須賀から横浜へ、そして桐生へと私と共に在りつづけている。周辺からどんどん人が居無くなる年齢になった今、サボテンはしっかり一番つき合いの長い生き物になったのである。そして、昔のことを聞かれると、私は文学少女ではなくサボテン少女でした、と答えている。



©Maki Ishii

石内 都 (いしうち・みやこ)

1947年 桐生市生まれ。横須賀市で育つ。2005年 第51回ヴェネチア・ビエンナーレ日本館代表。2007年より被爆者の遺品を撮影した「ひろしま」を発表。2014年 ハッセルブラッド国際写真賞を受賞。2015年 J・ポール・ゲッティ美術館にて個展「Postwar Shadows」。2016年『フリーダ 愛と痛み』を出版。2017年個展「肌理と写真」を横浜美術館で開催。2018年「横浜美術館コレクション 昭和の肖像」(アーツ前橋)に参加。

滞在制作アイデア

滞在中には実現しなかったけれども、前橋のまちなかに滞在したからこそ生まれたアイデアを紹介します。

ARTIST

ダラ・リーヴス Daragh REEVES

滞在期間：45日間

2015年11月13日～12月27日

● 外国映画を前橋でリメイクする

外国の映画を、前橋のロケーション、前橋の人でリメイクする。出演者だけでなく、撮影、編集、音響、照明全て前橋の人で行う。リメイクする映画の候補は「ティファニーで朝食を」。

● 8mmフィルムを使った映像作品

宝石店のショーウィンドウに、アナログの腕時計と宝石などを設置し、開店から閉店まで、1秒に1回撮影する。アナログの腕時計の秒針の動きとともに、1日のショーウィンドウに映る景色の移り変わりを記録する。

アーツ前橋では、平成29年度に12作家38点の作品を新たに収蔵しました。前橋市がこれまでに収蔵してきた作品は約710点になります。これらの美術作品は、市民にとって大切な宝ものであり、未来へ残して伝えていく贈り物です。ここでは収蔵作品と作家を紹介します。



ふるさとの風景を詩情豊かに描く

高橋常雄 《五料沼早春（赤城山）》
TAKAHASHI Tsuneo Early Spring at Goryonuma
昭和60（1985）年 紙本彩色

高橋常雄（1927-1988）は、昭和2年に前橋市才川町（現・日吉町）に生まれました。本格的に絵画制作を開始したのは終戦後の病氣療養中だった19歳で、はじめ洋画を学び、その後日本画に転向しました。日本画院や日展で経験を積み、編入した武蔵野美術学校（現・武蔵野美術大学）卒業後は、日本美術院を活動の場としていきます。初期に学んだ洋画の影響を感じさせる点描を取り入れた作品や、色面による画面構成、太い線による造形的な構成へと画風を変化させます。昭和49年に訪れたネパールで、信仰とともに生きる現地の人々を主題とした作品を精力的に発表し、自ら「ネパール色」と称した茶褐色と金を用いた独特の色彩は高く評価されました。昭和60年に日本美術院の同人になると、それまで10年にわたって描き続けていたネパールの画題を離れて、日本の風景に取り組みました。同年に院展の大矢紀、日展の中路融人、室井東志生との4人で異歩騎会（いぶきかい）を結成し、翌年のグループ展で発表した〈ふるさとの風景〉6点のうちの1点が、本作品です。

「五料沼」は前橋市の東部に位置する沼で、近くには国指定史跡の二子山古墳があり、雄大な赤城山を望むことができます。本作では遠景に雪化粧が残る赤城山が堂々とそびえ、《桑原》では一面の桑畑に赤城山、《坂東太郎》では利根川、《からっ風に遊ぶ》は妙義や浅間を遠景に空高く舞う鳳を描いています。いずれも高橋の特徴である金泥と茶褐色でまばゆいばかりの光彩を描き出し、郷愁のなかに温もりを感じさせます。

TOPIC

「アーツ前橋サポーター」

サポーターとはいったいどんな集まりなのでしょう。



アーツ前橋のサポーター活動は多岐にわたりますが、主には資料の整備、チラシなどの広報物を発送する作業、イベント関係のお手伝いなど、アーツ前橋で開催する様々な企画や施設の運営のサポートがあります。

サポーターが活躍する子ども向けワークショップ「あつひろば」は2015年から始動し、講師を招いたプログラムやスタッフとサポーターでのプログラムを年に数回行っています。ボランティア活動は依頼された作業をこなすという受動的なものが一般的かもしれませんが、今年の5月に開催されたあつひろばでは「サポーター祭り」としてサポーターが企画から運営までを自主的に行うなど積極的な関わりがありました。ほかにもサポーターが運用しているFacebookページやお茶会、サポーター向けの勉強会、展覧会を観に行くツアーなど自発的な活動があります。

サポーターとなった理由はそれぞれで一概には言えませんが、地域のために自分にできることをしたいという方もいれば、自分の居場所を探しにやってくるという方もいます。様々な理由で集まった、年代も考え方もばらばらな人たちが、お茶を飲んだりお菓子を食べながら他愛のない話をしたり、ゆるい繋がりがりだからこそできることをできる範囲でやろうとしている場になっていて、今後のサポーターの在り方も変化していく新しい可能性を秘めています。

まえばしぶんか探索隊

うしろまえばし

「うしろまえばし」はアーツ前橋のアートスクール受講生が立ち上げたプロジェクト。街を歩いて気になるものをアーカイブしていきます。活動はFacebookでチェック！

うしろまえばし
https://www.facebook.com/ushiromaebashi/

「スポットライトに照らされて」

昭和の香り濃厚な弁天通り。夜、ひと気のない通りを歩いていて、この公衆電話を見かけると、古くからの知り合いに会ったかのような、ほっとした気持ちになります。（隊員A）

まえばし COLLECTORS FILE #11

コレクターズ・ファイル

街の人が集めているものを紹介してもらコーナー。それがなんであれ、好きならば集めてしまうのが人というもの。集めればそこに新たな美が宿る？



3年前に、1年かけて世界一周の旅をした時に持ち帰った世界各国の紙幣と硬貨です。アジア、中東、アフリカ北部、ヨーロッパ、アメリカ、カナダ、中南米の34カ国を回りました。インドでは同じ1ルピー硬貨でも地域によってデザインが違ったり、国によって様々なのが面白いですね。イスラエルの硬貨はデザインと質感が好き。ネパールの紙幣も、紙の風合いが良くて、ヤクやサイなど動物の絵柄が多いのがお気に入りです。



BBQ バルコニー カグツチ 栗原大輔さん

情報求む！ 前橋で「こんな面白いモノを集めている人がいる！」という情報があればアンドアーツまでお寄せください。

EVENT

まちなかイベント情報

「Tシャツコレクション 2018」

2018年7月3日[火] - 8月31日[金] 11:00 - 19:00 (水曜休)
アーツ前橋ミュージアムショップ mina
全国の福祉施設やアトリエから、個性的でクスリと笑えるTシャツが集まります。
観覧無料(Tシャツはご購入いただけます)

「アーツ前橋ロビーライブ vol.17 ジャズ」

2018年8月19日[日] ①開演 13:00 / ②開演 14:30
アーツ前橋 交流スペース
アーツ前橋で行う小さな音楽ライブ。福田重男氏と三木俊雄氏によるジャズのデュオ演奏をお楽しみください。料金無料

「第十回 前橋若手落語家選手権」

2018年9月9日[日] 開場 12:30 開演 13:00
前橋テルサ ホール
前橋市出身の若手落語家がしのぎを削ります。
料金 / 指定席 3,000円 (当日 3,500円) 自由席 2,700円 (当日 3,200円)

今月のおすすめ by ROBSON COFFEE アーツ前橋店



軽い口当たりにカシスやオレンジのような柑橘系の甘酸っぱさが後を引く、夏の疲れた体にぴったりなケニア・カリアイニ。豆の販売は100g(720円)、200g(1,340円)の2種類。フレンチプレスでもドリップでも楽しめます。

EXHIBITION

アーツ前橋 展覧会情報

横浜美術館コレクション

昭和の肖像

写真でたどる「昭和」の人と歴史

主催：アーツ前橋 特別協力：横浜美術館

2018年7月6日[金] - 9月3日[月]

開館時間：11:00 - 19:00 (入場は18:30まで)

会場：アーツ前橋 地下ギャラリー

休館日：水曜日

観覧料：一般 500円、学生・65歳以上・団体(10名以上) 300円、高校生以下無料

※8月18日(土)と「ワールドフォトグラフィーデー」の8月19日(日)は

観覧無料

本展では、横浜美術館の写真コレクションを通じて、激動の「昭和」という時代を振り返ります。1926年から1989年という長きに渡った昭和は、関東大震災からの復興、第二次世界大戦、学生運動、高度経済成長、バブルの時代など現代を形作るさまざまな出来事が交差した時代でした。

今回の企画展では、ギャラリー1の「時をつむぐ」展にアーツ前橋の収蔵作品として展示されている〈絹の夢〉シリーズの作者である石内都の最初期の作品〈絶唱、横須賀ストーリー〉の内、55点が展示されます。本シリーズは、1977年に東京銀座のニコソロンで開催された石内の初個展で発表されたものです。桐生に生まれた石内は、幼少時代に横須賀へ移り住み、6歳から19歳までこの軍港の街に暮らしました。黒い粒子をとまぬ独特の質感を持つモノクローム写真は、石内自身が暗室で現像したヴィンテージプリントです。現代のデジタル写真とはまた異なる味わいをぜひお楽しみください。

※関連イベントや展覧会詳細は公式サイトをご覧ください。



石内都《絶唱、横須賀ストーリー #58 (久里浜)》
1976 - 77 (昭和51 - 52)年、ゼラチンシルバークローム
横浜美術館蔵

&Arts ISSUE 14 アンドアーツ 第14号

発行：平成30年8月10日 企画・発行：アーツ前橋 制作コーディネート：一般社団法人前橋まちなかエージェンシー
アートディレクション・編集・デザイン：殿岡 渉 (あしか図案) 写真：土屋ミワ (本屋写真館) ロゴデザイン：荻原貴男
アーツ前橋 〒371-0022 群馬県前橋市千代田町5-1-16 TEL：027-230-1144 FAX：027-232-2016 www.artsmaebashi.jp/